

いわて男女共同参画フェスティバル2017
復興庁男女共同参画班主催分科会

「まちづくり」への女性の関わり方について 議事録

日 時：平成29年6月17日（土）

場 所：いわて県民情報交流センター（アイーナ）
6階ラウンジ

復興庁男女共同参画班

○司会（秋田）：それでは時間となりましたので、これから、いわて男女共同参画フェスティバル2017・復興庁男女共同参画班主催分科会「『まちづくり』への女性の関わり方について」を始めたいと思います。私は司会進行を務めます、復興庁男女共同参画班の秋田と申します。本日は、できるだけ同じ出身の方で固まらないよう、事前に会場を5班に分けさせていただいておまして、私は、2班のファシリテーターも担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。各班には、私の他にも復興庁の職員がファシリテーターとして入っております。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、本分科会の目的及び流れについて御説明いたします。本分科会は、市町村における20から50軒程度の自治会単位でのまちづくりにおいて、女性の意見を反映させるため、その手段として、自治会の役員などに女性を増やすにはどのようにしたらよいかを考えていただき、その結果、お住まいの地域におけるまちづくりに、男女共同参画の視点が反映されるようなきっかけづくりを行うことを目的としています。

本日の流れにつきましては、まず、宮城県岩沼市と東松島市で御活躍されております2団体から事例発表をしていただきます。その後、班ごとに女性がまちづくりに参加することについて、本質的に重要なことは何かを考える話し合いをしていただき、感想や気付いたこと、質問を出し合い、各班で登壇者及びコーディネーターへの質問を1つに絞っていただきます。この話し合いは、班内で感想や気付いたこと、質問を出し合うことにより、ほかの方の考えを知り、再認識や新たな気付きを得ていただきたいという趣旨で行うものです。その後、全体での話し合いに移りまして、各班から1つの質問を代表の方からしていただき、登壇者若しくはコーディネーターから回答をいただきます。そして、コーディネーターから全体のコメント、閉会という流れになります。私からの説明は以上です。

それでは、本日の分科会のコーディネーターの若菜千穂さんを御紹介させていただきます。若菜さんは、特定非営利活動法人いわて地域づくり支援センターで常務理事、事務局長をされております。復興推進委員会の委員でもあり、農村計画や交通計画を御専門とされています。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

○若菜氏：若菜です。よろしくお願いいたします。（拍手）

○司会（秋田）：若菜さん、ありがとうございました。それでは早速、事例発表に移らせていただきますが、ここから若菜さんに進行をお願いしたいと思います。若菜さん、よろしくお願いいたします。

○若菜氏：本日は、土曜日のお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。私はコーディネーターという何だか大層な名前が付いていますが、基本的には、皆さんが普段困ったな、こういうのはどうしたらいいのかなと迷っているようなことを、本日は本当に素晴らしい事例を紹介していただける方が3名いらっしゃいますので、その方から引き出す役ということで、関わらせて頂きたいと思います。よろしくお願いいたします。

先ほど説明もあったのですが、皆さんのテーブルの上に何か置かれていて、何かやらされるのかしらという気持ちがあると思うのですけれども、難しいことではなくて、これから事例を御紹介いただきますので、基本的には質問とか感想をその都度メモしていただく。私もですが、思ったときに書かないと多分忘れてしまうと思いますので、今の時点で各テーブルの端の方、この附箋を1人5枚ずつぐらい配っていただいて、メモ代わりにしていただきたいと思います。ただ、1つだけ守っていただきたいルールを説明します。1枚の附箋には1つの意見ないし1つの質問を書いてください。ですから、私は10個質問が出たという方は、ちょっと足りないからよこせと言って、10枚。1枚の附箋には1枚の質問。私はいっぱいあるから、最初からいっぱいもらっておくわという方は、どうぞ是非いっぱいもらってください。ということで、これから御紹介する話を聞きながら、これについてちょっと聞きたいなとか、この点は素晴らしいかったとか、そういう感想を随時聞きながらメモしていただければと思いますので、よろしくお願いします。

早速、これから事例発表をしていただきたいと思います。最初の事例なのですが、今回は岩手県開催ということで、わざわざ県外から発表者の方に来ていただいたということで、宮城県の岩沼市の玉浦西まちづくり住民協議会会長の中川勝義様と、委員の齋藤洋子様のお二人に来ていただいています。では、まずみなさん拍手をお願いします。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）最初に、このお二人から20分程度事例を御報告いただきます。その次に、宮城県東松島市のサークル「コロッケ」の事務局長の渡邊和恵様です。

○渡邊氏：よろしくお願いします。（拍手）

○若菜氏：よろしくお願いします。お話を15分ほどいただきたいと思います。それでは、玉浦西まちづくり住民協議会から事例をお願いいたします。（拍手）

○中川氏：皆さん、こんにちは。玉浦西の中川と申します。本日は、男女共同参画ということで呼ばれてきたのですが、私ははっきり言いますと、男女共同参画には関わっておりません。関わっていない方が多かったです。ところが、震災が起こり、まちづくりをするときには、やはり男性だけの意見ではだめだということで、女性の意見、それから、年配の方や若い人の意見も聞いて、それでまちづくりの議論をしていかないと、小学生からこちらに住む人もいるのですから、そういう人たちの意見を反映しないと、なかなかいいまちにできないということ。余り長く話をすると、後の人の時間が短くなるので、我々はそういう若い人たちの声を聞きながらまちづくりをしてまいりました。

一番肝心なのは、行政が先頭に立って引っ張っていくのではなくて、住民の意見を聞きながらまちをつくっていくということに視点を置いたので、当然我々にかかってくる負担も大きくなります。でも、自分たちがこれから住む場所なので、みんなで考えてまちづくりをしましょうということでやってきました。ところが、我々はまちづくりなどした経験がないわけですから、専門家でもないし、どうやってつくったらいい

いのか分かりませんでした。幸い、岩沼市出身で東大の教授であった石川先生という方がおりまして、この方がまちづくり、あるいは都市緑化に関する物すごく権威のある人だったので、その方のアドバイスを聞きながらまちづくりをすることができました。

私が生まれて住んでいたところが、震災前はこれなのです（「震災前の岩沼市・相野釜地区」のスライドを提示）。この左側が海岸です。海岸で、砂浜があって、緑がいっぱいある。これは松の緑です。これは防潮林ということで国で植えた松の木です。少し右端の方に筋があります。これは阿武隈川から石巻まで続いている貞山堀という、伊達政宗が掘ったと言われている堀です。この堀は昔から私たちの生活の一部でありましたので、重用されておりまして。それが、2011年3月11日の津波でこういうふうになってしまいます（「震災後の岩沼市・相野釜地区」のスライドを提示）。少し松の緑があるようですが、これも全部枯れてしまいました。もう何も無いです。現在は、防潮堤も新しくしまして、防潮林も植えているのですけれども、まだ50cmかそのくらいしか伸びていません。こちらの貞山堀は幅を60%ぐらい広げまして、貞山堀の堤防を1.2mぐらいかさ上げしまして、現在に至り、大体工事は終わりました。これを詳しくすると時間がないので、まちづくりのことを話したほうがいいですね。

先ほど言ったように、ここが災害危険区域ということで、まるっきり住めないです（「市の概要と被災状況（津波浸水区域等）」のスライドを提示）。どこか別のところに移転しなさいということで、我々もそれは仕方がないなということで、ここから3kmほど離れた内陸のほうに移転することに決めました。これが玉浦という地域です。ここまで水が来たのですね。岩沼の48%を占めておりまして。一番南の端がここで10kmぐらい離れています。それで、みんなで話し合っ、ここに移転するということが決まったわけです。ということで、我々の思いをいろいろなところに詰めていきながら話し合っ、先ほど言ったように、女性の方の意見も聞きながら、まちづくりをやっ、てまいりました。あとは、齋藤委員が詳しいことはお話ししますので、バトンタッチします。

○齋藤氏：皆さん、こんにちは。今、中川会長から紹介されました。私も今は玉浦西まちづくり住民協議会の委員をしています。そして、それまでは、このまちづくりを決める玉浦西地区まちづくり検討委員会の一人として仕事をしてまいりました。私の地区は、当時この長谷釜という地区のちょうど被災したところの真ん中ぐらいのところにありました。

この委員を引き受けるに当たって、各地区から女性も1人参加する必要があるということで、どうしようかなと思っながら、まず最初に主人へ、「奥さんに引き受けるかどうか聞いてみてくれ。」という話が来ました。何と締切りが次の日だということで、考える時間が一晩しか無くて、「えー。」という感じで、「もっと前から話があるんじゃないの。」と思っ、たのですけれども、「明日締切りで、どうにかしてくれということだから。」と。ちょうど町内会長が、被災したとき私の家の隣だったの

です。隣ということもあり、これはこれほど。それで、一晩しか考える時間が無いというので、あらどうしましょう。そのとき主人に、「何でこれ、私にはできないからということで断ってくれなかったの。」と言ったのですけれども、「自分が返事するものではないから。」ということで、隣に住んでいた町内会長から言われたものだからねということと、候補となる女性の年齢的な問題もありました。私ともう一人他にいたのですけれども、そちらの方が小学生の子どもがいたものですから、集まりが夜ということで、その方にとっても悪いかなと思ったので。あとは、自分が今まで余り地域に対して貢献というか、何かしてきたかと言われると、特に何もなかったので、私はこの会に出席して話を聞くぐらいはできるのかなと思って引き受けました。引き受けたら大変だったのです。

行って話を聞いていればいいのという感覚で受けたのですけれども、行ってみたら、町内会長の役の人がまず1人、あと、若い男性の方が1人、あと女性が1人だったのですけれども、それはもう3人とも同じ地区だからいいやということではなく、その地区から本当に1人ずつの個性を出してくれみたいな感じで、必ず意見を言うのが地域の委員の役割ということでした。なので、個人で行っているというより、地区の代表。「代表なのだから、ちゃんと市に伝えなさい。」と言われる感じで出席していました。

被災後、地区単位の町内会で月に1回必ず集まって情報交換するという場があったのです。その場で検討委員会に行くに際して宿題が出されて、町内会で宿題として出されたものを検討委員会に上げて話し合い、さらに、その議論の結果を、地区単位の町内会に帰ってまた話し合いをして方針を決めて、再度検討委員会に持っていくということがありました。ここに7つ項目が出ているのですけれども、その項目が、いろいろ地区に持ち帰って話し合いをして、どういうまちにしたいかということで方針を決めていったわけなのです。この方針を決めるまでも、みんな好き勝手なことを自由に言うのです。新しくできるのだから、いろいろなこと、本当に現実的ではないことまでも言うので、それをまとめるのが大変でした。本当は一番したかったのが、電柱を見えるのではなくて地下に埋めてほしくて、電柱の地中化を要望したのですが、それはお金もかかるし日数もかかるということでだめでした。あとは大体みんなで検討して大丈夫でした。

皆さん、今、グループに分かれているのですけれども、この下の3枚の写真のように（「4. 想いを形にする（①まちづくり方針）」のスライドを提示）、その検討委員会も3つに分かれて、附箋というのでも先ほどみなさんに渡されたのですが、検討委員会でも附箋を渡されて、どうしたいかということ、もうみんな好き勝手に書くのです。遠慮して、私こういうふうに言ったらだめかななどというのもなく、全部自由に書いて、それを出して、それをみんなで検討していくということだったのです。だから、今、附箋を出されて懐かしいなと思ったのですけれども、こういうようにグループに分かれて意見を出し合ったので、すごくスムーズに、女も男も関係なく、すごく

話しやすかったというのがこの下の写真なのです。だんだん進んでいきまして、もう自分の行き場というか、災害公営住宅を借りるか、自主再建するかという方向に進んでいきました。

これは自分の区画をどこにするかという図なのですけれども（「4. 想いを形にする（③画地の配置方針）」のスライドを提示）、まず、100坪ぐらいがほとんどなのですが、この中で大まかに、まずぱっと見て自分はどこがいいかなというのがあると思うのです。自分はあそこに住みたいとか、あの土地がいいということがあると思うのですけれども、私たちの地域はコミュニティがまとまっていたので、前の被災した地区と同じメンバーがここに移り住んだわけです。となると、気心が知れているわけで、今度、隣の家に誰が来るかということが問題でした。自分がどこに住みたいというよりも、隣の人が誰で、後ろの人が誰でというのが気になって、決めるときにどうしたらいいかというので、地区の役員さんが1人ずつ、みんなで地図を広げて、この場所でどうだということ聞き取り調査ですね。私はここがいいのだけれども、隣は誰で、誰が来るということがありまして、地区の役員さんも大体長年住んでいるので、あの人とこの人はちょっと仲がよろしくないというのが分かるので、その人たちはちょっと離れたところに置くとかしました。私も実際決めるときにどうやって決めるのだろうなと思って、隣にあの人が来たらどうしよう、土地よりもそのことが心配だなと思いながら、すごく不安だったのです。そうしたら、上手い具合に、この人とこの人は離れたからとか、そういうふうになんと聞いてくれて、私も安心したのです。そうして、みんなに聞き取りをして、ここの土地でいいか、ここでいいかということ聞いて、みんなそれで何となく安心したような感じだったのです。その前は不安で不安で、隣にあの人が来たら嫌だなと、一生の住処になるはずが、「うわっ。」となっても困るなということで、その辺は地区の役員さんがちゃんと長年住んでいる人たちの仲の良さを知っていた。隣同士も1班、2班、3班と、みんなあると思うのですけれども、その方たちもなるべく似たような人たちが来るようにというので、なるべく元いた1班、2班、3班と同じになるように配置を考えたわけなのです。それなので、同じ人たちがいたので、引っ越して来たときも、みんな完成はばらばら、引っ越しもばらばらなのですけれども、特に挨拶もないのです。いつ引っ越して来るも何もなく、「来たよ。」みたいな感じで、隣同士で挨拶もなくて、「引っ越ししてきたからよろしくお願いします。」とか、そういうものがなくてもスムーズに入れた。挨拶も全然ない。「あら、来たのね、よろしくね。」ぐらいで、会えばそういう感じだったのです。だから、他の被災した地域と全然違うところは、そういうところだと思うのです。だから、引っ越してきても安心して住めるというか、そういう最初からのコミュニケーションで、隣の人と挨拶しなきゃねとか、どうしたらいいかとか、そういう心配は一切なかったです。そういう点が楽だった感じです。

この写真は、公園に自分たちで芝生を植えるところです（「玉浦西まちづくり住民協議会の主な活動」のスライド提示）。3つ公園があるので、この公園がどの公園

か、ちょっと分からないですけれども、住民のみんなで芝生を植えたのです。芝生は寄附していただいて、植えるということをして住民みんなでした。

この公園は別の公園になるのですけれども、似たような感じで、まごころ公園という、被災した区域の大体真ん中ぐらいに大きい公園があるのですけれども、そこに「かまどベンチ」というものが5つつくってあるのです（「地域での活動の様子（玉浦西まちづくり住民協議会 斎藤洋子）」のスライドを提示）。そのかまどベンチというのが、災害のときに炊き出しができるベンチなのです。そこをつくってもらったのはいいのですけれども、1回も使ったことがないということで、これは何かあったときに使ってみなくてはいけないというので、みんな恐る恐るです。使ったこともないしどうしたらいいのかも分からないので、誰かがやるんじゃないかと思いながら、誰もやらなかったので、防火クラブとして、炊き出しの訓練をやることを決めました。役員だけにかまどベンチの使い方ということで訓練をしました。ちょっと分かりにくいですが、この上に板があって、ここに座れるのです。この座れる板を外すと釜戸になっているのですけれども、この釜戸を使って、木材や炭は何がいいのかいろいろ調べまして、それで炊き出しの練習をしました。

この防火クラブというのも立ち上げるのが大変なことで、玉浦西全部の地区でやろうと思ったら、一回解散したものを復活させるというのはなかなか難しいのです。4つの地区があって、3つまでは防火クラブに入っているのです。でも、1つがなかなか了承を得られなくてまだ入っていない。だけれども、もう始めたほうがいいということで始めて、こういうように炊き出しをするのに婦人防火クラブだけでは心許ないので、消防団と、あとはスマイルサポートセンターの協力も得て、何とか炊き出しに成功しました。みんなに食べてもらったのですけれども、すごくおいしいと言われまして、それで疲れが吹っ飛んだ感じでした。おいしくいただきました。成功したと言えると思いますが、もう一回やれと言われると、もうみんな疲れて嫌だと言うのです。だけれども、また何かあったときには使わなくてはいけないので、覚えてだけでも重要なことで、大変良かったと思います。

もう一つ、女が役員をするというと、家族の協力がないとだめなのですけれども、玄界島へ視察に行くときに、2泊3日だけどうかと言われたとき、私は正直行きたくなかったのです。なのですけれども、役員から行け行けと言われて渋っていたら、うちの主人と娘から、「お母さん、せっかくだから行ってきな。」と言われて、「何で私行きたくないのに行けって言うの。」という感じで渋々行ったような感じでしたけれども、でも、楽しく行ってきました。勉強もさせてもらいました。だから、こういうふうに、こういう場に呼んでもらえるのもそうですけれども、本当に助けてもらった日本中、世界中の皆さんに感謝したいと思います。本当にありがとうございます。

（拍手）

○若菜氏：ありがとうございました。中川会長、追加でどうぞ。

○中川氏：まちづくりの件で、これは町の周りに木を植えたのです（「玉浦西地区 想いは

未来へ ふるさとの復興を願って」のスライドを提示)。これは我々のところでは居久根(いぐね)と言っていたのですけれども、農村地帯の家は田んぼが周りにあって、風当たりが強い。特に季節風。それを防ぐためにこれをほとんどの家で作っていました。それを我々もこのまちにつくろうと。そうしたら、だめだったのです。これは個人の資産なので、復興事業の予算ではだめだと。それで、これをあるところに発信したら、これを提供してくれました。木を寄附してもらって、これを我々で植えました。今、とても役に立っています。景観も良くなりました。これがないと本当に殺風景なまちでした。ありがとうございます。

○若菜氏：ありがとうございます。私から会長に質問があるのですけれども、今回まちづくりと男女共同参画、女性のということなのですが、「震災前は男女共同参画は俺に関係なかった。」ということだったと思うのですけれども、今回このように女性に齋藤さんのように参加してもらって、まちづくりに取り組んで、震災前の自治会活動というものと、今から、これからのまちづくりでは何か変わりましたか。会長の思いでもいいのですけれども、何が変わったか。変わっていなければ、変わっていないで。

○中川氏：変わっていないと思えば変わっていないのですが、変わったと思えば変わりました。ということは、先ほど齋藤さんがいろいろ説明したと思うのですけれども、まちづくりをするときに、男性と女性と一緒にやらないとだめです。自治会もそうなのです。震災前の私のところの自治会は、役員は男性ばかりでした。何かというと飲んでばかりだった。これは良くなかったですね。今は役員の中に女性2人に入ってもらっています。全部で10名ぐらいなのです。やはりいろいろな行事をやるにしても、どうしても女性の力が必要なのです。例えば夏祭りをしようとしても、子供会のクリスマス会をしようとしても、女性の力が必要なのです。男性では気が回らないところがあります。それで、震災を機にこういうまちづくりを考えている中で、私もやはり女性の力が必要だなと考えるようになりました。これからも、もっともっと女性の力が欲しいなと思っているのですが、いかんせん最近余力を貸してくれないようになって困っています。

○若菜氏：飲んでばかりだからじゃないですか。ありがとうございます。では、齋藤さんにも1つ質問なのですけれども、防火クラブは、岩手県内でいうと婦人消防協力隊みたいな女性の防災関連のチームだと思うのですが、立ち上げるのが大変だったというのは何か理由をもうちょっと教えていただけますか。

○齋藤氏：今は4つの地区が玉浦西となっていますけれども、被災前は一つ一つの地区に各1つ防火クラブがあったのです。私の地区は休部だったのですけれども、他の地区で解散したところもあったのです。そうすると、また始めるとなったときに、何でなくなったものをまたわざわざつくるのかと。まず頭に浮かぶのが、今回のような発表とかね。あとは、何をしてもそうなのですけれども、会長、副会長の選任。会長は誰がするのというのもあるし、そういうものは受けたくないということもります。女の人は、割と役を引き受けると大変ということがあるので、その役をしないで平の

ままでいいのだったら、多分「いいよ」ということだと思うのですけれども、誰かは会長をしなくてはいけないということがあって、それが防火クラブとかだと、2年に1回役員改選があるので、大体2年が終わると次の会長となってくるわけです。その会長になるのが恐ろしいのです。だから、3つの地区としては、その会長が嫌だということばかり言っていられない。安心なまちというので、何かみんなの支えになったらいいのではないかとということとか、何もなく消防団にばかり頼っているよりかは、女だって何かできるよねということで、あった方がいいということだったので、1つの地区は、いまだにオーケーが出ていないのです。やはり、なくなったものをなぜまた復活させるのと言われました。私は今、会長をしていますけれども、それこそ誰もやる人がいなく、「お願い、お願い。」と。こういう住民協議会にも入っていて、みんなの前にも出ているので、みんな「やって、やって。」という感じです。立ち上げて1年目ですから、誰も快く「はい、やります。」という人はいないのです。最初だから、みんな怖いのです。「何をするにも最初が肝心だ。」と言われました。「最初が肝心だから、余り面倒臭いことをすると、次も大変だから。」とも言われましたから。「ちゃんとしないと、次もちゃんとしなくなるよ。責任重大だよ。」と言われました。

○若菜氏：ありがとうございます。確かに女性が役を引き受けるというのは、私も女性だからこう言っではあれかもしれないですけれども、男性よりは、何となくしんどいような気がしてしまいますね。私の知っている事例で、生活改善グループを立ち上げたときに、役員になるのが嫌だと。なので、大人しいお父さんにとりあえず前に立ってもらいたいな。役員にとりあえず男性を付けておいて、でも、余りうるさく言わない人。それでみんなだまらまら生活改善をやっているという事例を今、思い出しました。ありがとうございます。

それでは次に、渡邊さんから、実際に様々な活動を熱心に女性のグループで一生懸命やられているという事例です。よろしくをお願いします。

○渡邊氏：皆さん、こんにちは。私は宮城県東松島市男女共同参画推進団体、サークルコロケの事務局をしている渡邊和恵です。盛岡は本当にうん十年ぶりで来ました。駅前がこんなに開けていて、すごいなと思いました。実は子どもたちにせがまれて、福田パン、御存じですか。あれがどうしても食べたいと中学生の子どもに言われているので、来月家族で来たいねと話しています。

それでは、まず私たちのサークルのことをお話ししたいと思います。平成15年、旧矢本町で、男女共同参画社会づくり事業企画実行委員の募集がありました。実行委員は、町内の各種団体の女性リーダーが揃い、男女共同参画の啓発活動が始まりました。私はそのとき、育児に追われる一般女性として参加しました。啓発活動は誰にでも分かりやすくしていこうということで、寸劇をすることになり、家族、夫婦、地域をテーマに、平成22年までは1年に1作品を上映してきました。その間、平成17年に旧鳴瀬町と旧矢本町が合併して、東松島市が誕生しました。平成20年には、私たちの活動

がもっと気楽に行えるようにということで、サークルコロッケという形での活動が始まりました。私たちは、男女が認め合い、支え合い、補い合う社会の実現を目指して日々活動しています。

次に、私たちの活動を1つ御紹介します。東日本大震災で、コロッケのメンバーは、それぞれの避難所などでリーダーとして活躍しました。そして、そこで気付いたことがありました。まず1つは、女性の視点を反映させた避難所運営をするのがいいということです。これは、女性が安心して生活できる避難所づくりをすることで、子どもたち、ひとり親世帯の親子、高齢者、そういう社会的弱者が安心して生活できる場になるということです。皆さん、忘れてはいけないことがあって、女性は社会的弱者の代弁者になれるということなのです。ですから、これは決してわがままではないのですということを、どうぞ自信を持って行動していただきたいと思っています。それから、震災対策に関することにもっと女性は積極的に参画する必要があるということです。女性が意思決定の場にいなければ、先ほど申し上げたような避難所をつくるというのは、非常に難しくなります。ですから、そのためにも女性の意識の向上がとても大事ななとすごく思ったのです。これらの重要性に気付いた私たちは、昨年度から女性のための防災リーダー養成講座を開催しています。サークルコロッケは、常に東松島市と一緒に行動してきましたので、市の防災課の方たちも、ちょうど女性リーダーが欲しいと思っていたところでしたので、うまく合いまして、市と共催で行うようになっていきます。でも、参加者からは、「地域では女性を必要としてくれないのですよね。」という声も聞こえてきています。それでは、せつかく女性の方が地域の役に立ちたいと、知識や資格を取ったとしても、地域から認められる存在にならなければ生かせないのではないかと思ってきました。では、どうすればいいのか、どうすれば認められるのか。それは、普段から地域の行事に参画し、信頼を得ること。これが私はすごく大切なことなのではないかと思えます。きっとここに本日いらっしやっている皆さんは、もうそういうリーダーとして活躍していらっしやる方だとは思いますが、私もこの認められるということが、とても大事なのではないかと思えます。震災のとき、サークルコロッケの女性たちは、各地でリーダーシップを発揮しました。この人たちはどうやって地域の信頼を得てきたのかなと、自分の仲間たちに14年も付き合ってきて初めて伺ってみました。

まず、立川さん。立川さんは170世帯の行政区に住んでいます。立川さんは御主人の転勤で、お子さんが小さいときに東松島市に引っ越して来られました。この地域に早く自分からなじみたい、自分を知ってもらいたいと、育成会の役を進んで受けて、公民館などで行っている趣味の教室とかにも積極的に参加しました。それがきっかけとなって、平成17年に地域生産加工研究会に誘われました。最近では、地域の男性から、退職後の男性は行き場がなくて困っている、だから、老人会をつくってほしいのだと頼まれたのです。現在は地域生産加工研究会の会長として活躍しながら、老人クラブ「きらく会」を立ち上げて、月2回活動しています。

次に、としえさんです。としえさんは50世帯の行政区に暮らしています。としえさんは、東松島市に8つある地区の一つである赤井地区の、隣の地区から、今のところに嫁いできました。まちづくり参画のきっかけは、誘われたことには何でも、子ども連れでも御自分でも、積極的に関わってきたそうです。そうやっているうちに、お嫁さん同士、お茶っこ飲みのときに相談などを受けるようになっていったのです。それで、地元の方から、ここを代表して市議会議員になってほしいと頼まれました。現在は、東松島市市議会議員として活躍しています。

次に御紹介するのは、澄子さんです。澄子さんは、専業農家のお母さん。72世帯ある行政区に暮らしています。ですから、早くから地域にはなじんでいました。JAの女性部にも入っていました。そして、女性部の会員を増やしたい、それから、これからやってくる高齢化社会に向けて、ずっと働ける喜びを感じられる老人たちを増やしたい。そう思って、産地直売所をつくりました。野菜をみなさん毎朝陳列に行くときに、その会員の方と会ってお話をするのが、今一番の楽しみだそうです。自分が野菜を出すときではないときでも行って、みんなとしゃべってくる。それが楽しいのよということでした。現在はJAいしのみき直売部会長として活躍しています。

次に御紹介するのは、サイ子さんです。サイ子さんは、東松島市の保育士として働いてきました。ですから、50歳で退職してから地域のまちづくりに参画したことになります。保育所では所長先生を務めたこともあり、主任民生児童委員に委嘱されました。その後は地区センター長を8年、行政区長を3年務め、地域のリーダーになりました。

次は私です。私の場合はまちづくりが仕事ですから、まちづくり、コミュニティに関わる方によくお会いします。そこで皆さんよく言う言葉は、若い人材がない、後継者がいない、そういうことです。赤井市民センターの仕事はたくさんあるのです。でも、人材育成も重要な仕事だと思っています。そこで、子どもたちにまちづくりに積極的に参画してもらっています。子どもたちは、何ととっても柔軟なのです。柔軟だし、固定観念がない。ですから、じゃんじゃん参画してもらおうと思っています。それから重要なことは、地域の素材を生かす事業をする。それから、地域の方に先生になってもらう。あとは、地区自治会でも行えるような、難しいことはしなくてもいいのです。漬物をつけたりとか。心肺蘇生を小学生がやったりするのですけれども、これは防災訓練でできますね。他にも、子どもたちが読み聞かせを練習して、老人福祉施設などで発表しているのです。だから、絶対に皆さんでもできることなのです。

次に「赤井の野菜を食べてけらいん市」。これは子どもたちが震災後、どんな赤井にしたいかということで、子どもから大人まで楽しめて、赤井の野菜がおいしいということを伝えたいということで、朝市を始めています。これは小学校5年生から大学生までが対象で、今「あかいつこカンパニー」という会社をしています。22人の子どもたちがいるわけですがけれども、まちづくりの楽しさは、いろいろな世代の人といろいろな物をつくっていけるとというのが楽しいのだと思うのです。子どもからすると、

大人と50歳違う、30歳違う。そういう人たちと一つの物を作っていける。子どもたちへ、このまちづくりの楽しさを伝えたいと思っています。

では、女性が地域に参画することにどのような良いことがあるのでしょうか。女性は子育てや介護などの経験から、幅広い世代と交流することができます。生活の中で、家事などいつもしていることで仲間を作ることができます。何より、住民の胃袋をつかむことができます。これが重要です。ですから、女性は交流事業には絶対に欠かせません。女性は至るところで井戸端会議を始めます。男性の方、「またやってるよ。」と思いませんか。これで会話の中から地域の課題をキャッチできるのです。男性から見ると、女性の話は長いと思いませんか。違います。なぜ長いのか。それは、結論までの過程にどんな出来事があったのか、それに共感してもらいたいのです。地域に一人暮らしの高齢者がいるとして、そこに訪問した場合、いろいろな話をされます。その話に共感できるのは、やはり女性です。ですから、女性は見守り事業に欠かせないのです。

それでは、赤井地区で実際に女性が活躍している自治会を御紹介します。ここは10年ぐらい前にできた住宅地で、408世帯が暮らしています。ここをまとめているのが、紺野さんです。この方のすごいところは、自治会にあるものをつくってしまったのです。ここに住むおばあちゃんたちが、近くにお店がないから孫にアイスも買ってあげられない、そんな話をよく聞いていました。ここは、この自治会の集会所です。この和室を利用して、駄菓子屋さんを開店したのです。子どもたちが下校すると、駄菓子屋さんが子どもたちでいっぱいになります。そして、紺野さんは学校とも連携をして、子どもの見守りを行っています。それから、学校の特別支援学級の子供たちが授業の一環として、買い物の練習にも来ているそうです。

地域で活躍する女性をいろいろ御紹介してきました。このような活躍ができるのも、家族が健康であること、それ以上に、御主人や家族から応援があるからです。市議会議員のとしえさんは、選挙に出ようか迷っているときに、正にこの言葉を旦那さんから言われたそうです。コロッケの女性たちに、このような質問をしてみました。皆さんは、地域のリーダー的な存在となって、これまで男性からやっかみを受けたことはありますか。皆さん、口を揃えてそんなことは一度もないと言いました。この女性たちは、地域住民から、その人の人柄が認められ、信頼され、この人に地域を任せたい、この人と一緒にまちづくりをしたいと思われているということですね。これこそが、男や女は関係ない、これが本当の男女共同参画だと思います。超高齢化、少子化の現代、まちづくりは男だ女だって言っている場合じゃないんです。男も女も子どもたちも、その人の持ち味を出し合って、認め合い、支え合い、補い合いながら、寄ってたかってまちづくりをしていきましょう。男女共同参画で人と地域をつないでいきましょう。どうもありがとうございました。（拍手）

○若菜氏：寸劇で鍛えた分かりやすい説明をありがとうございます。1つだけ質問なのですが、今、いっぱいリーダーの方、本当に地域のリーダーになっているよという方を

御紹介いただいたのですけれども、仲間も16人ほどいるということで、女性に聞くのは失礼ですが、御年齢は何代くらいの方が多いかを教えてくださいと思います。

○渡邊氏：16名のうち、10名ほどが大体60代中盤から70代になります。それから、私たち世代も6人ほど、40代後半から50代前半ぐらいの、2つの世代で活動しているということです。私は常々思っているのは、60代はまちづくりでは40代だと思っています。もう働き盛りみたいな感じで、地域の皆さんを見ていてもすごくそう思いますね。

○若菜氏：ありがとうございます。私からすると、嫁の立場から、姑の人たちと一緒に楽しくやっているという、そのこともすごく聞いてみたいなと思いました。ありがとうございます。

それでは、予告をしていたとおり、皆さんもいろいろ聞いてみたいなのが出てきたと思います。班の中でテーブルごとに質問や感想を出し合って、申し訳ないのですけれども、1班1つ、とっておきの質問、若しくは意見を1つみんなで選んで、その後にぶつけてもらいたいと思います。各班での話合いに移りますが、自分の名前と今のお住まいの地域を自己紹介していただいた後に、附箋に書いた感想を話しながら、附箋を読み上げる感じを出してもらって、この班からはこの質問をぶつけてみようというものを、みんなで選んでいただきたいなと思います。それで、時間が足りないのですけれども、予定では35分ぐらいから質問をぶつけるタイムにしたいなと思っております。もしかしたら時間が足りないかもしれないので、様子を見て40分ぐらいからかなと思っておりこちらで合図を出します。皆さん、バスの時間があるのですね。なので、時間を押せないで、遅くとも15時には終えなければいけないということです。すみませんが御協力をいただきたいと思います。それでは、班ごとをお願いします。

(各班での話合い及びその後の全体での話合い)

○若菜氏：ありがとうございます。本当にこんな短時間で選べるとは思いませんでした。素晴らしいと思います。それでは、1班から感想なり御意見をお願いしたいと思います。端的に1分ぐらいでお願いできればと思います。

○1班代表者：一関の藤井と申します。よろしく申し上げます。玉浦西のまちづくりについて、住民にアンケートをとって、それを皆さんの思いを形にするということで、まちづくりの方針が①から⑦にまとめてあるようですけれども、そのブラッシュアップする方法や基準は何だったか、どういう過程があってその7つになったのかなど。これは私だけの意見かもしれないのですけれども、この7つの中に女性の目線はどこに入っているのかなというところをお聞きできればと思います。以上でございます。

○2班代表者：2班です。関連する質問なのですが、検討委員会の人選についてです。新しく検討委員会を立ち上げるために何が課題で、どういうふうにして検討したのか。それから、旧団体が多分あったと思うのですが、婦人会とかそういう団体も地区ごと

にあったと思うのですが、その人たちが新しいコミュニティに移行するに当たって、どのような関わりをしたか。その過程が知りたいという質問です。

○若菜氏：3班さん、お願いします。

○3班代表者：紫波町の小笠原と申します。私たち3班では、まず一つに、この女性の力、すごい発揮したね、すごいね、素晴らしいねという共感の声がいっぱい出ました。もう一つ、居久根についてですけれども、この居久根が形付けられて、今、目に見える。それが何年くらい経ってようやく芽がついて今の形になっているのか。できればこの居久根の写真も見たかったなと思うのです。ということで、女性の力はすごいねと。あとは家族の思いやり、協力がなければできないことだよねという、一般的な話になりました。ありがとうございました。

○若菜氏：ありがとうございます。4班さん、お願いします。

○4班代表者：4班です。4班からは、コミュニケーションをどうすればとれるのか。具体的には、委員会とか防火訓練のときなどでも、どうやって人を集めていましたかという質問が出ました。

○若菜氏：このコミュニケーションというのは、誰と誰のですか。

○4班代表者：自治会とか、集まり、話合いのときのコミュニケーションです。

○若菜氏：ありがとうございます。5班さん、お願いします。

○5班代表者：5班です。5班は、かまどベンチを使った炊き出しの訓練ですけれども、いろいろ苦労なさったというお話ですが、いろいろ苦労なさっても、一応きちんとできたということは、大きな要因としましては、自治会に占める女性役員の数が多いのではないかと考えられるので、女性役員の数を大幅に増やすためには、多分他とは全く違う方法をとらない限りはそんなに大きな数字は見込めないのではないかと思うのですけれども、その辺のところをお聞きしたいと思います。以上です。

○若菜氏：ありがとうございます。それでは、いずれも玉浦西さんの質問が多いのですが、答えられるところからでいいです。会長、お願いします。

○中川氏：難しいことを聞かれたね。

○若菜氏：多分、アンケートをとってから、それをどう合意形成を図って7つにしたのかというのは、皆さん分からなかったのかなというところと、あとは確かに既存の組織について、一回ばらばらにしたのか、どう関わったのか。お願いします。

○中川氏：このまちの姿、この区分けがあったと思うのですが、その区分けをどうして決めたのか、どういうアンケートのとり方をしたのかということだったと思うのですが、本当は長い話です。

まちづくりの基本をしたのは、まちづくり検討委員会。それが基本です。その前に、先ほど東大教授だった石川先生の話をしました。この方が震災の次の年に。学生を連れてきて、震災の跡地を、ここにどんな木があった、ここにどういう道があったとかくまなく調べて歩いたのです。それで、その資料をもって、検討委員会が始まる前に我々だけを集めて、実際、集団移転先をつくるにはこういうまちになると思うのです

が、自分たちの住まいを、あなたの地区はどの辺にしますか、あなたの地区はどの辺にしますかと。これは決まりではないけれども、仮にということだったのです。それで、私のところでしたら、一番海から遠い西側がいい。そうしたら、もう一つの地区は学校側の少し東の方にあるから、学校の近くがいいやと。あなたがここだったら私はここと、何となく決めたのです。ところが、検討委員会で実際に本番で決めるときには、そのとおりになってしまいました。これは、みんなの気持ちが一緒になったということですね。そんなに議論はなかったです。

- 若菜氏：まちづくりの7つの方針について、どうやって決めて行きましたか。
- 中川氏：まちづくりの方針は、これは実際にまちをつくるための検討委員会で話し合っ
て、委員が18名プラス3名の21名、この中で各々自分たちでこのまちにこんな物が欲しいな、こんな物が欲しいなと、自分で書いて出したわけです。それをここに敢えて、
その中から7つに絞って挙げたのです。先ほども説明があったと思うのですが、大体
1番目の「自然災害に強い安全なまち」はオーケーだと思うのです。2番目の「自然
エネルギーを活用した環境未来都市を実現するまち」も大体、自然エネルギーは太陽
光発電を屋根に付けてというような話だったのです。これもオーケー。ところが3番
目の「空が広く感じられる美しい街並みのあるまち」、電柱を地下に埋めようとい
うことでしたが、これはだめでした。先ほど齋藤さんが話したように、お金もかかるし
日数もかかるということで、だめだと言われたのです。4番目、「地域の交流ができ
る集会所や菜園のあるまち」、これは集会所とかをつくってもらいましたので、オー
ケーです。5番目は「緑豊かで水辺のある景観のよいまち」。これは先ほど貞山運河、
貞山堀があったと言いましたね。あれをまちの中に越してこられないかと言ったら、
それは取水するところがないので、流すのができなくて、これはだめだということで、
それは貞山運河に見立てた道路にしました。6番目の「スーパーと個人商店が複合し
た楽しく買物ができるまち」。これはスーパーができました。大変我々は便利になっ
ております。7番目、「地域のみまもりにより、高齢者福祉と子育てが充実したまち」。
地域の見守りにより、高齢者福祉と子育ての充実。これは今、我々の課題です。大変
高齢率が高くなりました。そして、若者がいないと子どもがいないということで、子
どもも少ないです。一生懸命頑張っています。
- 若菜氏：ありがとうございます。そうすると、このまちづくりの方針は、アンケートか
らつくったのではなく、18名の委員が意見を出してまとめたもの。
- 中川氏：そうです。
- 若菜氏：そうすると、齋藤さんは。
- 齋藤氏：うちの地区は地区に持ち帰って議論しました。
- 中川氏：今は私のところの地区のことを言ったのですが、地区によっては持ち帰って話
し合います。これは結構難しいです。いろいろな課題が出てきます。市からもいろ
んな条件を聞きます。それを検討委員会で決断できないのです。我々は代表ですけれ
ども、それは各地区に必ず持ち帰ってみんなの意見を聞いて、それを基にまた検討委

員会に持って行ってという、その繰り返しです。

○若菜氏：ありがとうございます。齋藤さん、この中で例えば、女性は特にこの意見が多かったという男女の意見の違いなどはありましたか。

○齋藤氏：7つを挙げたうちなのですけれども、これを決めるときが、私の地区の場合、みんなで集まってどういうまちにしたいかということで挙げてもらって、その中から決まったのがこの7つなのです。だから、出してもらったときはもっといっぱいあったのです。いろいろあった中で、まとめてまとめて、これはこの分類だねと、それこそこの附箋に書いたものを挙げてもらってという形でやって、そこでだんだんこれとこれはまとまるね、この3つを1つにまとめたらいいかなど、それでこういう方針につながっていったのです。だから、一人の意見でこの方針の一つということではなくて、みんなが出したものをまとめて7つの項目になったというのでしょうか。これは私の地区だと、その家庭から誰か一人、代表が出てくる集まりへ決まって参加するのです。だから、集まったときに意見が出るけれども、各家庭のお父さんなりお母さんなりが出てきたら、今度は家に帰って、こういうことがあったんだと話し合ったりとか。だから、自分一人だけで決まったということではないです。必ず家族会議が行われていたはずですよ。

○若菜氏：震災前の既存の組織は、この復興のまちづくりにどう関わりましたか。一回解散ですか。

○齋藤氏：ほとんどが解散ですね。老人会も解散、長谷釜は解散。自治会だけが残った感じですかね。あとは、先ほど言った防火クラブの解散したところと休部。消防団は1つだけ残ってあとは解散。ほとんど同じくみんなで集団移転したわけではないので、3分の1ぐらいはよその地区へ出て行ってしまったので、その活動自体、お金も絡んでくるのですけれども、みんながみんな地元に残ったわけではないので、もう解散しましょうという話が多く出たので解散して、お金も分けたりしたので。

○若菜氏：お金が絡むので、確かに一回解散ということだったのですね。

○齋藤氏：そうなんです。

○若菜氏：関連して、コミュニケーションをどうすればというのは、イベントなどでどう人を集めたかということですかね。人をどう集めましたか。

○中川氏：玉浦西のことでいいですか。今、齋藤さんからお話があったように、震災前の集落の55%ぐらいが新しいまち、玉浦西に入りました。震災にあっても、既存の自治会は解散しておりません。これが解散するとまとまりがつかないので、まちづくりなどできません。既存の自治会はそのままで、その会長もそのまま進めてきました。それで、まちができて、新しい自治会ができて、初めて新しいコミュニティづくりということになっております。

○若菜氏：ありがとうございます。では、5班からなのですが、女性役員の数が多いのが良かったのではないかということなのですけれども、せっかくなので、これは渡邊さんに。女性に役員やリーダーになってもらうコツみたいなものはあるのですか。

○渡邊氏：赤井地区は、東松島市が自治会制度というものをとってしまっていて、各自治会の役員さんに赤井地区自治協議会に上がってきていただいて、赤井地区自治協議会は市だけで行っているまちづくりではなくて、各地域が入っており、赤井だけではないのです。

東松島市には8つの地域があるのです。その8つの地域にそれぞれ市民センターというものがある、そこに自治協議会と町協議会というか、そういう人たちがそこを組織して、市から指定管理を受けて市民センターを運営しているわけなのです。それで、市だけに頼るのではなく、その町協の中にも福祉を考える福祉部会、安心・安全を考える安心安全部会とか、地域交流を考えるコミュニティ部会とか、そういう部会に分かれているわけなのです。

赤井の場合は、環境を考える環境部会の他、福祉部会、コミュニティ部会、安心安全部会の4つの専門部会に分かれているのですけれども、その専門部会には、大体各自治会が、充て職とかそういうものになってしまっていて、環境部会は週に何回かごみを地域に出すときの環境衛生推進員がなったりとか、福祉部会は民生委員さんがなったり。コミュニティ部会というのは、地域交流とか地域で子供を育てましょうという共同教育、宮城県では学校、地域、親の三位一体で子供たちを育てましょうという共同教育が進められていますので、その交流というのは、先ほどの子供朝市をするような、そういう部をコミュニティ部会といますが、そこには育成会の親が出てきたり、そういうようなことで女性が自然と出てくるようになっていきます。

○若菜氏：ありがとうございます。これは私も今、実はすごく関わっているのですけれども、コミュニティをどうするかとか、コミュニケーションをどうするかとか、住民自治をどうするかというのは、自治会だけではなくて、その上にそれを束ねるというか、また別の連合的な組織があって、そこは部会制にしている、必ずしも自治会の役員だけでなく、やりたい人も入れるような部会制の活動にすると女性は参加しやすい。こういう仕組みを赤井はとっているということです。これは一つ全国的にもこうなっている、皆さんの地区もお勧めです。これは行政が入らないとだめですけれども、こういうものは確かにすばらしいことかなと思いました。

最後、居久根。思いの丈を、時間が来ているのですが、居久根について、今どこまで来ていて、どれぐらいで決着するのか。

○中川氏：居久根は今、3年目だね。最初からこんなではないですよ。高い木は高い木であり、低い木は低い木であります。これは西側と南側で1,000m（「玉浦西地区 想いは未来へ ふるさとの復興を願って」のスライドを提示）。この居久根は市のもので、勝手に扱ってはだめだと言われました。どうするかというと、市から我々住民が借りました。無償ですけれどもね。それで、（公財）都市緑化機構というところがあるのですが、そこが懸賞募集をしていたので、我々のやり方を応募したら国交大臣賞をもらいまして、その賞金がありました。それでもって苗を購入して、みんなで植えました。みんなといっても、たまたま造園屋さんが我々の仲間におりましたので、その人の手

を借りて、みんなで植えました。あれから約3年、大分成長しました。ところが大変です。雑草が伸びてきている。これの処理が大変です。でも、住民の皆さんはほとんど毎月、総勢200名ぐらい出てきております。それでみんなで草を取ったり、草を刈ったりしております。いつまで続くか心配です。

○若菜氏：1,000年続くんじゃないですか。

○中川氏：そうですね。

○3班代表者：木の種類は何でしょうか。

○若菜氏：木の種類は。松ですか、杉ですか。

○中川氏：松、杉はないので、ドングリとか。

○若菜氏：広葉樹、多分ナラとかですね。

○中川氏：よく分かりません。実のなる柿とか梅とか、そんなものもいろいろ植えています。

○若菜氏：素晴らしいですね。ありがとうございます。

すみません。時間をオーバーしてしまって、私の未熟なところなのですが、最後、居久根というか、防風林の話で、そういう広葉樹の木を植えたということで、200人が毎回毎回自分たちの森だと。こういうものがあるということが、むしろコミュニティを強くするのではないかと思います。だから、震災は大変だったと思うのですが、こういうものを是非生かして1000年の村になる可能性がありますね。

○中川氏：はい。

○若菜氏：素晴らしいなと思いました。そういう機会をいかにするのが地域のリーダーである皆さんの腕の見せどころかなと、私は一つヒントをいただいたかなと思いました。ということで、これで締めたいと思います。本日はいろいろな班ごとに大変思いの丈が話し合われて、とてもためになったのではないかと思います。どうもありがとうございました。お疲れさまでした。（拍手）

○司会（秋田）：コーディネーターの若菜さん、事例発表者の中川さん、斎藤さん、渡邊さん、ありがとうございました。最後に復興庁統括官付参事官男女共同参画担当の武隈から閉会の御挨拶を申し上げます。（拍手）

○武隈参事官：復興庁の武隈です。本日はこの分科会に参加いただきまして、ありがとうございました。若干時間は足りなかったとは思いますが、活発な御議論、ありがとうございました。私の印象としましては、事例の発表も具体的なお話でしたし、質問の内容もすごく具体的でしたので、私ども東京にいて、頭の中だけで考えていてはいけないということを、改めて自分自身としては感想を抱いたところです。

ちょっと宣伝だけさせていただきますが、こちらに私ども復興庁男女共同参画班でやっていることを説明している資料がありますので、本日のようなイベントを皆さんの地域に出かけて実施することも可能ですので、是非お気軽にお声を掛けていただければと思います。

最後に、コーディネーターの若菜さん、事例発表をされた中川さん、斎藤さん、渡

邊さん、それから、参加者の皆さんへ感謝の意を込めて、拍手で終わりたいと思います。皆さん、ありがとうございました。（拍手）

○司会（秋田）：ありがとうございました。最後になりますが、皆様にお配りしておりますアンケートに是非御協力をお願いいたします。また、本フェスティバル全体のアンケートをお持ちだと思いますので、両方の記入が終わりましたら、各班のファシリテーターのところまで提出をお願いいたします。アンケートを記入後は、お時間の許す限り登壇者の方々と自由に交流いただけたらと思います。

以上をもちまして、いわて男女共同参画フェスティバル2017・復興庁男女共同参画班主催分科会「『まちづくり』への女性の関わり方について」を終了したいと思います。本日はお忙しい中お越しくださいます、誠にありがとうございました。（拍手）

以上